

## 藤田嗣治展 一東と西を結ぶ絵画

府中市美術館 2016. 10. 01～12. 11



本展は「藤田嗣治」(1886～1968) 生誕 130 周年記念としての開催で、未公開作品を含め国内外の代表的作よりおよそ「110 点」が展示されている。画伯は 26 歳で渡仏し、試行錯誤の末に生み出した“乳白色に描く下地、画相筆で引かれた流麗な墨の線”という独自の画風で、日本的で繊細な美意識と巧みな技術で人々を魅了した。

彼の作品がその個性を引き立てたのは、「裸婦」や「自画像」といった西洋の古典的な画題を通して、ヨーロッパの人々に真に認めてもらうことを目指し「東と西を結ぶ絵画」と呼ぶに相応しいものであるとされている。



《自画像》 1929 年 油彩・カンヴァス

構図は、硯と紙の置かれた座机に向かい、おかつぱ頭・丸眼鏡・ちょび髭、時にはピアスで、脇には子猫や喫煙小道具を配し面相筆を持ち描こうとしている。

また、壁には裸婦やプロフィールのデッサンがかかる、お気に入りの「十八番」を揃えた画伯の 40 歳代初頭の特異のスタイルを十分盛り込んだ作品である。

この自画像は、アトリエの実景というよりは、展示・販売用に演出されたものと見るべきとされている。



《五人の裸婦》 1923 年 油彩

作品は、それぞれ五感を表し、布を持つ女性が「触感」(左端)、耳を触るポーズが「聴覚」、口を指さす「味覚」、犬を連れた「嗅覚」(右端)、裸婦が「視覚」(中央)で、裸婦に概念的なものを象徴させるという“乳白色の裸婦の豊作の逸品”である。

注目作品は、20 代の東京芸術学校卒業制作《自画像》、30 代の“乳白色の下地”でパリの画壇で浴びた時

代(上図)、40 代の「旅の時代」の《カーナバルの後》、50 代の「戦争画」《アッツ島玉砕》、70 代の晩年に描き続けた《小さな主婦》などの作品である。